



NO.459

R7年11月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

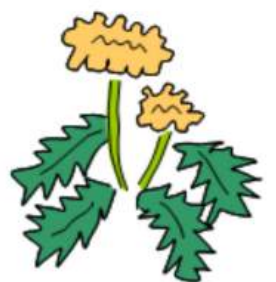
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「熊」にまつわる話

施設長 木下 昭二

この原稿を書いている今、三気の里の玄関周辺は、キンモクセイのいい香りに包まれています。極端に秋が短くなっているように感じても、そういった草花や自然の移ろいの中では、いつものように季節感を得られるちょっとした中に、幸せを感じられることに感謝します。

そのような中で、このところ毎日ニュースで聞かない日はなくくらい熊の被害の報道に、心が痛くなります。ちょっとした被害だけなら未だしも、今年は襲われて命を落とされる方も後を絶たず、近隣で「熊出現」の報道があっている地区にお住まいの方は、毎日が休まらない日々が続いているのではないかと推察します。

今回は、県名に「熊」が用いられている熊本に住む私たちだからこそ、その「熊」についての話を書いてみ

たいと思います。と、その前に、既に報道等でも言われていますが、九州には「熊がない」という話しはご存じでしょうか？ 正確に言うところ「生息はしていたが、絶滅してしまっただ」というのが、正しい表現になるかと思っています。その時期や理由について調べてみると、記録として残っている最後の熊（ツキノワグマ）の生息確認は、今から七十八年も前の一九四一年になります。その理由としては、江戸時代から明治にかけて、開発による農地拡大や燃料に用いるために原生林が伐採され、熊が食料源としていたドングリや椎の木などの伐採が進み、生息地としていた場所が激減したことに加え、熊は毛皮や、漢方薬の原材料となる胆嚢が重宝され、その当時、無秩序な狩猟が行われたことで個体数が急減し、絶滅に繋がったとされています。

この「人と熊の生息における歴史」から考えると、本来熊の生息地であった場所（山間部）を、人の都合によって開発したことの弊害が、今になって表れて来ているようにも思えます。それに加えてここ数年の気候変動に伴う酷暑等の影響により、餌となる木の実の不作等で、熊が人の住む場所にも餌を求めて出て来ざるを得ない状況になっていることが考えられます。ニュース等によれば、生態系を守る為に定期的に行われていた熊や獣害動物の駆除が、高齢化や人手不足などの影響によって、後手になっていったことが今のような状況を招いてしまった要因の一つでもあるようです。

最近では、熊を駆除する自治体に対して「苦情」の抗議が相次いでいた、との報道もありましたが、ここまでは人への被害が拡大し命を落とされる方まで出てくると、そもも言っておられない状況であると個人的には思っています。一刻も早く現在の状況が改善され、人と熊とが上手く

共存していける環境が整うことを切に願っています。

【番外編】

県名が「熊本」になった由来！

お恥ずかしい話ですが、今まできちんと考えたことがなかったです。旧名の「肥後」以降、元々「隈本」と呼ばれていた土地を、加藤清正公が一六〇七年に熊本城を築城した際に、「隈」の字に含まれる「畏（おそれる、かしこまる）」という意味が武將の居城にふさわしくないと判断し、力強い印象を持つ「熊」と改めたことが「熊本」とされた由来とされています。改めて、未だ熊本地震から復興半ばの名城「熊本城」に誇りを持って、完全再建を見守りたいと思います。





「秋」といえば散歩

季節では「秋」ですが、日中は暑い日が続いています。利用者の方の衣替えも、いつしたらよいのか悩むところです。しかし、夜や明け方は、少しひんやりしてきましたので、そろそろ衣替えを考えている日々です。

今年は猛暑が早くから始まり、10月に入ってから暑い日が続き、中々散歩ができませんでした。久しぶりに、少し気温も気持ちの良い日を選んで散歩に行きました。Aさんは「散歩」となると、空気を消して動かず、やっと靴を履いたのに、ドアが開くと脱いだりと、散歩は苦手でした。久しぶりに「一緒に行きますか？」と声をかけると、自分から靴を履き、先頭に歩いているスタッフの後ろを付いてきてくれるではないですか。驚きもありましたが、何も言わず先を歩いていると、手を繋ぎに来て一緒に歩きました。鼻歌を歌ったり、満面の笑顔で歩きました。この1回だけの奇跡なのかと思いましたが、その次も同じように自分から靴を履き、小走りで付いてきてくれました。私の中で、今年1番の嬉しいニュースです。

主任 八木 良江

「小さい秋、感じられましたか？」

10月に入ったとは言え、残暑がまだまだ厳しい今秋。涼みながら秋を感じ美味しい物を食べようというコンセプトのもと、10月15日に菊池方面へレクリエーションに行ってきました。まずは、七城町にあるママトコキッチンで昼食をとりました。食肉加工センター直営のレストランという事もあり、お肉の味がとてもしっかりしていて、ゆったりとした空間の中で、事前に皆さんそれぞれで選んだメニューをととても表情よく食べられている姿が印象的でした。

次に向かったのは、菊池溪谷。当日菊池市はやはり気温も高く30℃近かったのですが、菊池溪谷は4～5℃気温が低く、風が心地よく感じられ、涼を感じる事ができました。30分程川沿いを散策して、休憩所でおやつにあんみつを頂きました。水が澄んでいて、水の色が青く見え、とても空気が綺麗な場所でした。そんな中、利用者さんがどんな反応をするのかなと思っていたのですが、皆さんとても良い表情をされ、普段施設では見ることのできない表情をされている方もいました。がしかし！花より団子ですかね(笑) 皆さん、昼食とおやつの時間が1番いい表情でした(〇)

私は12月には三気の里に入職して丸1年になります。研修等でも学ぶ機会を多く頂き、その中で余暇支援の大切さの話がありました。私たちもそうですが、仕事ばかりでは息苦しくなります。利用者さんの余暇を充実させる事はQOLを高めることに繋がります。今後も皆さんが楽しめる機会を提供できるように支援をしていきたいと思っています。

生活支援員 渡邊 聡

「3班の利用者さんとの関わり」

三気の里に入職して半年ほどが経ちました。日々、3班の利用者の方々との関わりを深めている所です。3班の作業では、野菜の袋詰めや製品の運搬などを行っています。一人ひとりの利用者さんに合った役割を考えて、日々の支援に努めています。作業が早く終わった日は、散歩などを行い、余暇活動も皆さんと一緒に楽しんでいます。作業であっても、余暇活動であっても、安全に楽しめることを意識して取り組んでいます。また、3班のレクリエーションでも、ピザ作りをしたり、家族湯に行ったりと、私自身、良い経験、思い出ができています。今後も、3班の利用者の方々が「私が居て良かった」と、思えるような居心地のよい環境を作っていきたいと思っています。また、一人ひとりにあった支援方法を模索し、一人ひとりの個性を大切に支援していきたいと思っています。

生活支援員 松村 昌栄

「愛情表現」

何気ない日常会話で、ある利用者の方が〇〇さん（スタッフ）は優しいけど厳しいよと話し始めました。私が、優しいだけじゃダメなのですか？と問うと「優しいだけじゃダメ。厳しくないと言うこと聞けないから。厳しいだけなのも〇〇（自分）を守ってくれない」とのこと。利用者さんが支援者の優しさを感じ取り、自分のために厳しくいてくれていることに感謝していること、それをよく分かっていることを伝えてくれたことが嬉しかったです。その時の利用者さんの言われた支援者の優しさとは、親身に話を聞いて行動してくれる人、厳しさとは、悪いことは悪い。それがなぜ悪いのか教えてくれる人のように思いました。日頃の支援の中で利用者の方の様々な感情、気持ちを受け流していないか、向き合えているのかと考え直しました。私たちは、親でも先生でもありませんが、私の対応や言葉が利用者さんの一部になっていること、自分の支援を優しさも厳しさも含めていつの日かありがたいなと思ってくれれば嬉しいと思わせてくれたエピソードでした。

生活支援員 清田 彩織

日々、勉強

この春から就労継続支援B型事業所への配属となり、日々、戸惑いと新鮮さを感じています。最も驚いたのは、サービスを提供する事業所としての評価体制の大きな違いです。

入所支援では、個別支援計画の充実度やチームケアの質など、主に「支援の質」が重視されてきました。B型事業所では、それに加えて「稼ぐ」こと、つまり「平均工賃月額」が事業所への報酬に直結しています。この2本の軸が評価の根幹をなしています。この「稼ぐ」という意識への変革に四苦八苦しています。これまでは利用者皆さんの「安心」や「安定」を最優先してきましたが、B型では「生産性」「効率」「商品力」といった、まるで一般企業のような視点が求められます。

支援に関しても、これまでに経験したことのない家族間のトラブルや、困りごと、利用者さんが地域の方だからこそ求められる行政、他事業所との密な連携など「生活の支え方」に就労支援の深みを感じています。

主任 森田 康之

「いやしの時間」

GHの方々は、平日は16時まで仕事をされその後GHへ帰って来られます。手洗いうがいを済ませると各自洗濯物畳み、お風呂の準備をします。その後はテレビを観ながらお風呂の順番を待つのですが・・・。

ある時、GHはじめのAさんが私の背中をトントンとされ、テレビのリモコンを差し出されました。「あっ。テレビ点いてなかったですね。ありがとうございます。」と伝えると満足そうに頷かれ、ソファのいつものお気に入りの場所へ座られました。とてもほっこりする出来事でした。

次の日は、入浴準備を済ませソファに座られていたので、私の方から「テレビを観ますか？」と話しかけると自らリモコンを持って来られました。その後、これをきっかけにAさんと私のお決まりのやりとりになっています。

近く、外出の予定があるので「お刺身食べに行きますよ。」と伝えると、満面の笑みで頷かれました。そのようなやりとりを通して、意思疎通できる事が私自身の喜び、いやしでもあります。このいやしを糧に、利用者さんとの関係を深めていけたらと思います。

世話人 田畑 仁美



療育雑記

経験を重ねていく大事さ

主任 久米 善久

自閉症スペクトラムの特性として、大きく分けて社会的なコミュニケーションが難しい、特定の物事に強いこだわり（または反復性）がある、感覚が過敏（または鈍麻）という点が挙げられます。こうした特性から、対人関係の構築や柔軟に思考、想像すること、社会的に適切にふるまうことを苦手とする方々が少なくないといわれています。

一般的には大きく分類されますが、長所や、特性から見て取れる人物像も様々で症状の重さが同じでも、まったく同じ特徴を示す人はふたりとないと言われています。ある方は大きな音は大丈夫であるが、一定の音は苦手である。ある方は騒がしさが苦手であり、騒がしい状況では座って過ごすことが難しいが、音楽を聴くと座り続けることができるなど、特徴は様々です。数年前に担当を受け持たせていただいたSさんは騒がしい

場所、初めての場所が苦手で、園内でも集団で過ごすことが難しく、一日を通して自傷行為を伴うパニックを起こす状況でした。担当を受け持たせて頂いた当初は、ただひたすらパニックに至らないよう、周囲と距離を置いた支援となっていました。また、パニックになった際も、怪我がないように保護するしか手立てがありませんでした。余暇時間は他の方と離れ、自室で過ごし刺激をできるだけ軽減するように心掛け、部屋で横になって過ごすことが多く、音のない環境で過ごすことが、パニックに至ることなく当初は一番安全で適した過ごし方だと考え支援にあたっていました。他者と関わらないことが、Sさんにとってはパニックもなく安定して過ごせるのだとさえ考えていました。園内では様々な行事や外出の機会があり、それに一緒に参加するのも不安でした。参加するには集団の中で関わっていかねければなりません、パニックにさせてしまったらどうしようか、上手く参加できるのだろうか等とマイナスのことしか考え

られず、支援という支援が全くできていない状況でした。ただ、支援者として恵まれていたことは部署の関係で日中活動も夜間の余暇支援も一緒に過ごすことができることでした。関わる時間が長くなることで、些細な状態の変化が少しずつ感じられるようになりました。大まかに苦手と捉えていたことが、本当にそうなのだろうか、大丈夫なのではないだろうかと疑問を持ち始めました。それを境に刺激の少ないところから挑戦をするようになっていました。まずは余暇時間で他の方が過ごしている環境（リビング）で一緒に過ごしてみることから挑戦してみました。当時の園内の常識（刺激の少ない環境で過ごす）ではタブーであったかもしれません。

しかし、関わっていくうちに表情の変化や、しぐさが何となく察知できるようになり、この表情だったら大丈夫かな、ちょっとタイムアウトしようかなと判断が付くようになりました。すると、少しずつ他の方と過ごす時間を長く持つことができるようになってきました。それから

徐々に行事や、外出でも集団の中でも過ごすことができるようになってきました。それに至るまでは失敗も多々ありましたが、周囲の協力もあり、なによりもSさんの頑張りで苦手と思われる環境でも過ごすことができるようになりました。一つの難関と思われる状況を突破すると、見えなかった景色が見えてくることがあります。そしてまた次への挑戦が始まります。それを重ねていくことで成長に繋がるのではないかと思います。それにはできないという固定概念を覆す必要もあります。ある読んだ本で、「すぐれた支援者は、押したり引いたりして、成長を促します。支援を受ける側の感覚に大きな負担とならないように気つけなければいけません」が、それと同時に、ある程度は踏み込んでいたり、だまっさで引き下がったりしなければなりません」と書かれていました。Sさんとの関わりで個々に沿った支援で経験を積んでいく大切さを学びました。これからも個々に沿った支援を心掛け、社会参加へと繋げたいと思います。

サービス向上

「全国湯めぐり旅 秋保温泉編」

主任 小城 崇

9月12日に温泉イベントを行いました。入浴時間に浴槽に入浴剤を入れて、各所の名勝や名物を眺めながら、温泉巡りの雰囲気味わってもらおうと企画をしているものです。

今回は宮城県の由緒ある日本三大名湯の秋保(あきう)温泉でした。磊々峡(らいらいきょう)や巨大こけしの写真を眺めながら、皆さんゆっくりとお湯に浸かられていました。女性利用者のAさんからは、「いい香りで、ゆっくりできたよ」と仰って頂きました。男性利用者のBさんからは、「いい匂い。温泉に入ったよ」と笑顔で仰って頂きました。入浴介助を行ったスタッフからも「匂いもいいし、まったりした感じでリラックスできるね」と好評な様子でした。来月は「熱海編」、以降「南紀勝浦編」、「嵐山編」と続きます。ちょっと

とても利用者の皆さんの楽しみの一つになってもらえれば幸いです。



運動会

「運動会を終えて」

生活支援員 菅原 恵太

初めて運動会の主を担当し、利用者の皆さんに楽しんでもらえるように、実行委員や沢山のスタッフに協力して頂きました。今年はとても暑い日が続いており、運動会当日もとても暑く、日差しも強かったため、今回か

らテントの中で開会式、閉会式を行いました。競技では30m走を最後まで駆け抜ける利用者さんもいれば、ゆっくりと歩いてゴールされる利用者さんもいらっしゃいました。年々ゆっくり歩かれる利用者さんが増えているのかなと感じました。障害物競走、お菓子取り競争と、皆さん競技を終えられた後には笑顔がみられていました。当日に様々な変更があり右往左往することもありましたが、利用者の皆さんが最後まで元気に楽しまれていたので良かったなと感じています。

相談

「挑戦」

相談支援専門員 武谷 祐子

長い夏が終わり、ようやく秋になりました。1年を振り返るにはまだ早いですが、この原稿を書くにあたり、最近何があったかなと考えると、今年も公私を問わず色々なことに挑戦することができたなと感じました。

新しいことに挑戦するのは少し勇気がいります。初めは不安や迷い、緊張もあります。しかし、その一歩先には必ず新しい発見があります。うまくいかなかったも、「やってみた」という経験が次につながると思います。

三気の里のような入所の施設では、できることが限られているように感じるがありますが、ご家族や支援者の手を借りながら取り組めることもたくさんあると思います。小さなことでも新しいことに挑戦して、その経験を周りと分かち合えたら、毎日の中に少しずつ彩りがもたらされるように感じます。利用者の皆さんには、こうした様々な経験を積み重ねていただき、自分なりの生き方や楽しみを見つけていただきたいと思います。



11月スケジュール

04(火) 芸術の日
08(土) 開園記念祭
13(木) 九州・山口・四国自閉症施設連絡協議会
17(月) 歯科実習
18(火) 偲ぶ会
20(木) 嘱託医来診
21(金) 温泉の日 ドーナツ記念日
22(土) 地域バレー

25(火) 1班レクレーション
田中Dr.ケースカンファレンス
26(水) リハの日
28(金) ゴールドクラブ三気の会理事会
29(土) 4R白川
30(日) かくたつ研修 ～12/2
毎週月曜日 訪問理容サービス
毎週水曜日 BeTREE役場販売
BeTREE
＜営業時間＞9:30～17:30



berreeJ14

沢山のご厚意

ありがとうございます

ございます

【寄付】

三気の里家族会

田中満子様 林 千紗子様

【寄付物品】

中嶋久枝様 吉田 和信様

赤星 央子様 中村 秀隆様

ホシザキ南九様

ヤマモト住建様

西日本防災様

ジェイアイシー九州様

【後援会ありがとうございます】

森川マサミ様

編集後記

11月に入り、急激に気温が下がりが寒くなってきました。私自身、衣服の調整があまりできず、風邪をひきそうになってしまいましたが、体調管理はしっかりとしていきたいと思っています。

白石 峻真

